

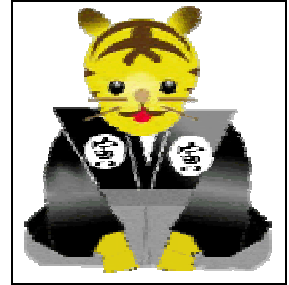
あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。

## Q &amp; A

Q : 昨年のジャガイモから芽が吹いているが、今年の種芋として利用できないか？

A : 家庭菜園としてなら生産性（収量）は劣りますが利用は可能です。

ジャガイモの芽は生育始めのうちはイモの栄養分で芽が伸びますが、小さなイモや水分が抜けてシワシワになったイモでは芽を伸ばす力が弱いので生育が劣ります。また、タネイモとしての管理がされていないので、ウィルス病などに感染している場合もあるからです。利用される場合は長く伸びた（2 cm程度以上）芽は掻き取ります。一つの芽には2~3個の成長点があるので心配ありません。植えるのは3月に入ってからです。それまで芽を余り伸ばさない為には、箱や袋から出して光が当たるようにしましょう。



今回は園芸作物に対する管理のコツなどについて書いてみました。

1、野菜の原産地を知ること。

園芸品目は多種多様に亘り、その生まれ故郷である原産地も様々です。現在店頭に並ぶ野菜は、人間にとって都合の良いように改良を重ねてきておりますが、やはり栽培に際しては、その生まれ故郷の気候を知ることが重要なことです。以下に主な野菜の原産地を示します。これらの地域の気温や湿度、日照の強さなど気候を推測しながら栽培環境を思いやってください。

トマト、ジャガイモ アンデス山脈。キャベツ、ブロッコリー、玉ネギ 地中海沿岸。  
ナス、サトイモ インド東部。メロン エジプト周辺。スイカ 南アフリカカラハリ砂漠。キュウリ ヒマラヤ山麓。ダイコン、ホーレンソウ 西アジア(ペルシャ周辺)。  
カボチャ メキシコ周辺。カンショ 中米。イチゴ 南米(チリ周辺)

2、暑さ・寒さは人と同じ。

園芸作物の生育適温は原産地の違いはありますが、基本的には人間と同じと考えてください。ただし、人間は「暑い、寒い」と声を出して言うことができ、歩行移動して自分が過ごし易い環境に移動することができます。植物は訴えたり、移動することはできません。従って、栽培する方が作物を観察し適切な管理を行う必要があります。

3、畑は「火＝乾燥」の「田＝圃場」。

水田は「水」の「田」、畑は「火」の「田」と表すように、畑は基本的に乾燥している圃場に水を与えながら作物を栽培する場所です。従って、当JA管内のように、もともと水田であった場所で園芸作物を栽培することは困難を伴うことが多くなります。基本的には客土など盛り土を行うなど栽培環境を整えることが重要です。栽培環境を良くすることが以降の園芸作物栽培を容易にし品質・収量の向上が望めます。

4、病虫害防除について

自然界の中での栽培は病虫害の発生は避けて通れません。これを避けることが可能なのは密閉型の植物工場での栽培のみです。現在、病虫害の発生条件はほぼ明らかにされていますので発生予察による予防散布が基本になります。しかし、発生予察の観測対象は基本的な病虫害に限定されていますし、地域的には大雑把な範囲でしか捉えられていないのが実態です。よって、実際には汎用性のある予防剤の散布を行い、あ

とは近隣の圃場での病虫害発生状況の観察による防除対策を講ずることになります。

なお、噴霧器などで噴出口のノズルの摩滅による薬剤のボタ落ち、噴霧状態の不良が良く見られます。こうなると薬剤の無駄と効果の低下につながりますので点検、交換が必要です。

#### 5、肥料について

肥料の三要素のうち、窒素（N）はもっとも施用効果が目に見えて表れます。しかし、窒素の形態もいろいろあります。化学肥料から来る硝酸態窒素はもっとも即効性である。硫酸などアンモニア態窒素や尿素なども即効性であるが、地温の低い時期は温度によって効果発現が遅くなります。有機態の窒素は分解に時間がかかるため発現はかなり遅く、地温が低い時期は殆ど効かないと考えてください。従って、有機栽培においては注意しないと窒素不足による生育不良、収量の低下を招きやすくなります。

2月後半になってくると消雪後の追肥時期となってきますが、このときは「そさい3号」などの速効性肥料を使うこととなります。

#### 6、野菜の品種について

現在流通している種子は殆どが「F1」種子となっています。「F1種子」に対する言葉は「固定種」です。「固定種」は栽培した作物の実や穂などから種をとって栽培しても、元の品質が再現可能なものを言います。現在ではエンドウ、ソラマメ、インゲンなどを含む豆類等の雑穀種子くらいではないでしょうか。「F1種子」は効率的な生産のため、選抜された特定の雄性の個体と雌性の個体を採種の度に掛け合わせて作ります。この種子を栽培して得られた実などから採取した種は遺伝的に様々な要素を持っているため、播種し栽培しても元の優良な性質が再現できる可能性は極めて低くなります。おいしかったメロンやトマトなどの種子をとっておいてもあまり意味はありません。また、トマトやキュウリ、メロン、イチゴなどの果実類は育種段階でハウス栽培を前提としていますので、露地栽培では様々な障害が出やすくなっています。少なくとも梅雨時期や秋雨時期の雨よけは必要となっています。

#### 7、土壌管理について

長年使ってきた畑の土壌の診断をすることは、栽培管理上重要なことです。我々職員も年一回は健康診断を受けます。車も2年に一回は車検があります。畑の土壌も露地畑は数年に一回、ハウス土壌は2~3年に一回は土壌診断するべきです。簡易に検査できる土壌のPH, ECは人間で言うなら体温と血圧と考えて、毎年でも検査して下さい。ただ、検査の数値以前の問題として、地下水位の高い圃場や水のさす圃場では、畑作物が利用できる土層が限られてしまいます。排水を徹底して畑作物が利用できる土層を広げることが肝要です。

[土壌診断の主な項目]

PH, EC, CEC（肥料を保持する力）、リン酸吸収係数（施用したリン酸分が土壌に取り込まれてしまう力）、石灰、リン酸、加里、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、腐植など。

#### 8、堆肥の利用について

堆肥の利用については前号でかなり詳しく記しましたので手短かにします。春先は地温が低いので有機物の分解は進みません。また、未熟の堆肥を施用すると害虫を寄せることにもなります。よって、ジャガイモや春大根などの作付け前には使用しないことが無難です。

#### 9、農機具の点検について

農作業に欠かせない管理機や防除機、草刈機などの始動、点検は2月中には行っておきます。前年からの燃料を残してあるとかかりが悪くなります。まして混合油の場合はストレーナーやキャブの詰まりを招きやすいのでカラ運転などを行い、完全に抜いておくことが必要です。